

4. 初期邦訳の広告・書評からみえるモラエスの宣伝戦略について

佐藤 征弥

1. はじめに

ヴェンセスラウ・デ・モラエス (Wenceslau de Moraes) は、1854年ポルトガルのリソンデ生まれ、海軍士官としてアフリカやマカオでの勤務に就くかたわら文筆活動を行なった。1897(明治30)年に神戸に移り住んで外交官となり、領事を1913(大正2)年まで務めたが、おヨネの死を契機におヨネの故郷である徳島に隠棲して執筆活動に専念し、日本を題材にした作品を祖国ポルトガルに発表し続け、1929(昭和4)年に75歳で亡くなった。

死後90年以上経った今日でも彼の作品は読み継がれ、この10年間に限っても、『モラエス作品集』¹や『極東素描』²といった著作が装いも新たに刊行されたほか、モラエスを主人公にした小説『孤愁(サウダーデ)』³や、『新モラエス案内』⁴『モラエス読本』⁵といった研究書が刊行されるなど、今もなお彼に対する関心は薄れていない。

モラエスの作品が日本において評価されるようになったのは、死後になってからである。最初の翻訳本『日本精神』は死後6年経って盛大に営まれた七回忌法要に合わせて刊行された⁶。筆者は昨年度の本プロジェクトにおいて、この法要および『日本精神』の刊行について、当時松本学が主唱した日本主義が文化全体に浸透してく中で、積極的にその時流に乗ったことを明らかにした(佐藤2021)。そして『日本精神』を皮切りに翌1936(昭和11)年にかけて『徳島の盆踊』『日本夜話』『おヨネと小春』の邦訳が矢継ぎ早に刊行され、その後、間があいて1941(昭和16)年に『極東遊記』、1942(昭和17)年に『日本歴史』『大日本 一 歴史芸術茶道』が太平洋戦争終戦までに刊行された(表)。

本稿では、これら初期の邦訳の刊行においてモラエスをどのように売り込もうとし、また受け入れられたのかを出版社の本作りの特徴や広告・書評から捉えていくことにする。

2. 『日本精神』について

2-1. 『日本精神』を最初に刊行した理由

邦訳の刊行にあたり最初に選ばれたのが『日本精神』であり、第一書房から出版された。『日本精神』を最初とした理由は、彼の思想と日本観を提示して日本の讃美者であること

¹ モラエス著、岡村多希子訳『モラエス作品集』NPOモラエス会、2012。

² モラエス著、岡村多希子訳『極東素描』モラエス研究会、2018。

³ 新田次郎、藤原正彦『孤愁(サウダーデ)』文春文庫、2015。

⁴ 深沢暁『新モラエス案内』アルファベータブックス、2015。

⁵ モラエス読本編集委員会編『モラエス読本』NPO法人モラエス会発行、2017。

⁶ 外務省亜米利加局の会田慶佐は1934(昭和9)年6月22日から徳島毎日新聞に“O “Bon-odori,, em Tokushima” (邦題『徳島の盆踊』)の翻訳を連載したが、単行本としては刊行されなかった。

を知らしめておくことにより、日本人の関心を呼び、受け入れてもらいやすいだろうという狙いがあった。『日本精神』が発売されたすぐ後で、花野は『セルパン』紙に「モラエスと日本精神」と題した解説を載せた（花野 1935）。『セルパン』は第一書房が刊行していた月刊の文芸誌誌であり、出たばかりの『日本精神』を宣伝する目的で書かれたものである。花野はその中で、モラエスを「その身と魂をあげて日本の生活に溶しこんだ詩人」と評し、『日本精神』は「モラエスの思想を知る最も重要な著述」と位置づけた。さらに本書の刊行の意図を「近來、再認識の高訓されてゐる日本精神は、たとへ、それにどんな長所があつても、日本人自身が自慢してはどうしても力強くは響きにくい。ところが、それを外国人が、しかも知名の文士が三十幾年の涙ぐましい體驗を通して、それを藝術的に表現すれば、その及ぼすところは甚大であらう。」と記している。七回忌に際してモラエスを国内外に広く紹介するために拓務省、国際観光局、外務省、国際文化振興会、日本文化連盟といった組織が参画し、まさに国をあげてモラエスを盛り上げたが、それに最も相応しい作品が『日本精神』であった。翻訳を担当したのは、徳島出身で徳島中学 1 年生の時からモラエス宅にポルトガル語を習いに通っていた花野富蔵であった。

2-2. 第二の小泉八雲

『日本精神』の広告・書評が表の資料 1~3 である。資料 1 の広告文は、1955（昭和 30）年にモラエスの生誕 100 年を記念して作られた『モラエス案内』に当時の新聞広告として掲載された文章である（徳島県立図書館 1955）。出展が示されておらず、どの新聞かは不明であるが、徳島県の阿南の出身である佃實夫は、この広告文を子供時代に新聞でみた『わがモラエス伝』に書いている（佃 1966）。佃は後年、徳島県立図書館に勤めていた時に『モラエス案内』の編集に携わった。

この広告文において興味深い点として次の二つをあげる。一つ目はモラエスを「第二の小泉八雲」と評していることである。今日でもモラエスは、小泉八雲（ラフカディオ・ハーン、Patrick Lafcadio Hearn）と比較して語られることが多いが、最初から「第二の小泉八雲」として売り出したのである。小泉八雲が亡くなったのは、1904（明治 37）年であり、およそ 30 年後にモラエスの『日本精神』が出たことになる。小泉八雲の他にもこのような日本讚美者がいたことをアピールすることが、モラエスを世に出した目的の一つであった。モラエス自身も小泉八雲を高く評価しており、小泉八雲が描いた日本人像の如く自らの生活を日本人の庶民に近づけ、日本人の思想や信条に対しても偏見をもたず可能な限り理解し受け入れようとした⁷。第一書房は小泉八雲の出版に力を入れており、全集を出していたこともあって⁸、生前から徳島に八雲と似た外国人作家がいると噂されていたモラエスの本を送り出すことは歓迎するところであった。

⁷ モラエスの徳島時代の暮らしぶりについては花野富蔵『日本人モラエス』（青年書房、1940）に詳しい。

⁸ 『小泉八雲全集』全 17 巻・別巻 1 巻、第一書房、1926-1928。

2-3. 南欧詩人

二つ目は「南欧詩人」の一人と見なされ、カモンイス (Luís Vaz de Camões) やピエール・ロティ (Pierre Loti) と比較されていることである。カモンイスは16世紀に活躍したポルトガルの詩人であり、ポルトガルの文学史上最も有名な存在である。ロティはフランスの作家で、明治期に二度来日し、滞在中のできごとを本に著している。ロティは小泉八雲のような日本の賛美者ではなかった。モラエスも小泉八雲に向ける親愛の情とは異なり、ロティについては多くは言及しておらず、むしろ冷ややかともいえる目を向けているが、『おヨネと小春』の前書きにロティの「将来の文学は敬慕の文学である」という言葉を引用し、同書の本文中でも「日本への真の情愛と同情との浸透した幾頁かを、この優れた印象家の賜物に帰する義務がある」と記し、一定の敬意を表している⁹。新聞広告の文章は、ロティの特徴である叙情性あふれる表現がモラエスと共通すると指摘している。

モラエスが「南欧詩人」と括られていることは奇妙であるといえる。モラエスを詩人と呼ぶことの妥当性については後述するが、南欧詩人として売り出した背景には、当時、日本の文学界において南欧詩人がブームになっていたという状況があった。南欧詩人という括りが生まれた経緯としては、まずイタリアを舞台にしたアンデルセン (Hans Christian Andersen) の長編小説『即興詩人』の存在があった。森鷗外による邦訳が明治35(1902)年に春陽堂で刊行され、青年たちにイタリアへの憧れを抱かせた。また、『即興詩人』の中でイタリアの詩人ダンテ (Dante Alighieri) の『神曲』が紹介されており、これは大正時代に邦訳された¹⁰。さらに、南欧ブームに火がついたのは、堀口大學らがフランスの詩人を紹介するようになってからであり、これには第一書房が積極的な役割を果たした。長谷川郁夫は第一書房を起こした長谷川巳之吉の評伝『美酒と革囊 第一書房・長谷川巳之吉』の中で、第一書房の出版活動が起こした「第一書房文化」と呼べるものが存在すると指摘し、その特徴を「著者や翻訳者の在野性」と「南欧の光と風」の二つに集約されるとした(長谷川2006)。「在野性」というのは、文壇、アカデミズムの主流から外れている文学者や学者を用いたことであり、花野富蔵もその一人である¹¹。もう一つ特徴である「南欧の光と風」について長谷川は「第一書房を形成する堀口大學、大田黒元雄、岸田國士らディレタントたちの遊戯空間は、じつは、文学が言葉だけで成り立つ世界であることを再認識させてくれる発信装置であった。「月下の一群」が、「近代劇全集」が、南の風の薫りが当時、一部の青年たちの間にどれほど爽やかな印象をもたらしたか。」と指摘している¹²。

⁹ 筆者はこの部分は、ロティの短編集『秋の日本』に収められている「日光霊山」においてでロティが少年から花束をもらう場面としている(佐藤征弥「モラエスとハーゲン — 生へのまなざし、死へのまなざし —」, 2013年の日本比較文学学会第49回関西大会のシンポジウム「モラエスの憐れみのまなざし—ロチ、ハーゲンを先達として」)。

¹⁰ 大正6年に中山昌樹による全訳が東京洛陽堂から刊行されている。また、山川丙三郎訳が大正3年から11年にかけて各篇に分けて東京警醒社より刊行された。

¹¹ 花野の略歴については本報告書の河田「戦前のモラエス受容における花野富蔵と佐藤春夫—日本の文学者におけるモラエス受容(2)—」を参照されたい。

¹² 『月下の一群』はフランス近代詩人66人の詩を堀口大學が翻訳した訳詩集であり、1925(大正14)年に刊行された。『近代劇全集』は全43巻が1928(昭和3)年に出版され、35巻と36巻が南欧編である。

さらに長谷川は、同書の中でモラエスの『日本精神』にも触れており、「察するところ、花野はラテンの風を頼りに第一書房に訳稿を持ち込んだものと思われる。」と推測している。

2-4. 新居格の存在

このように第一書房はモラエスを第二の小泉八雲として、また南欧詩人として宣伝したが、第一書房との関係をもう一つ指摘しておきたいのは新居格の存在である。『日本精神』は1935（昭和10）年6月に発行されたが、同年9月に新居格が主導して翻訳したパール・バック（Pearl Sydenstricker Buck）の『大地』が第一書房にから発行された。新居格は、花野の旧制徳島中学の先輩であり、モラエスの七回忌では花野とともに計画段階から関わっており、花野が『日本精神』の翻訳を進めていることを知っていた（佐藤2021）。それぞれの原稿をどちらが先に第一書房に持ち込んだのか不明だが、第一書房を選んだのは相談のうえであろう。ちなみに『大地』は大ベストセラーとなり、これにより第一書房は出版界における地位を不動なものとした（長谷川2006）。

2-5. その他の書評

資料2は日本図書館協会による『日本精神』評である。「晩年は妻の郷里に移り住んで、その地に残る日本の伝統の気風を通じて、日本人の生活を十分に味到」とおヨネが亡くなった後で神戸から徳島に移り、四軒長屋の一角で市井の人として庶民の生活に溶け込んで暮らしたことを示し、「日本人を深く理解した点に於いて、決して、ヘルンに劣るとは言えないであろう」と評価している。資料3は徳島日日新報に載った地元の書店小山助学館の広告である。「特に関係深い徳島のインテリゲンチャ諸氏に薦む」と地元ならではの宣伝となっている。

3. 『徳島の盆踊』について

『日本精神』が出て3ヶ月後の1935（昭和10）年9月には、二冊目の邦訳『徳島の盆踊』が第一書房から刊行された。表の資料4に『徳島の盆踊』の書評を示す。出典は1936（昭和11）年に版を重ねた『日本精神』の巻末に掲載された広告である。この書評で注目したいのは「モラエスの萬物を捨離して行ひすました求道の底を流れる日本的な思想と生活に脈々と波うつものは、かの詩聖アミエルの示した人生哲學の深刻さと愛惜とを偲ばせるものでなくてはならない。實に本書こそはモラエスがアミエルの言葉に従ひ「心の遺書」として我等に與へた彼の『方丈記』であり『徒然草』に他ならぬ。」という文章である。『徳島の盆踊』は、おヨネが亡くなって失意のモラエスが、領事の職を辞して神戸からおヨネの郷里徳島に移り住んでまもなく書き始めた作品で、徳島での生活が色濃く描かれている。この作品中には、書評に示されているように『方丈記』、『徒然草』、『枕草子』といった日本の随筆文学の古典が紹介され、自らも真似して日記形式で記した章が含まれている。花野は第一書房の雑誌『セルパン』9月号に『徳島の盆踊』の中から日記部分の抜粋を載せて

宣伝している（花野 1935）。

上記の文章に出てくるアミエル（アンリ・フレデリック・アミエル，Henri Frédéric Amiel）はスイスの哲学者、詩人で、30年以上にわたって綴られた膨大な日記が死後発見されて刊行されると内省的で誠実な内容が評判となり、ヨーロッパの作家たちにも大きな影響を及ぼした。日本では『アミエルの日記』前編・後編がそれぞれ大正 10（1921）年、大正 14（1925）年に刊行されたのが最初であり¹³、以降、たびたび出版され、昭和 10（1935）年には、岩波文庫からシリーズとして刊行が始まり、『徳島の盆踊』が刊行される直前の 1935（昭和 10）の 2 月に第 1 巻、5 月に第 2 巻が刊行され、1941（昭和 16）年までに 8 巻が刊行された¹⁴。今日、モラエスを語る時にアミエルと比較されることはないが、当時としては大評判となった西欧人の日記文学であり、その人気にあやかろうとしたことがうかがえる。

4. 『日本夜話』について

第一書房から発行した三冊目が『日本夜話』であり、これ以降の著作は他の出版社から刊行された。本書に関する書評や広告を見つけることができなかつたので、本書の花野によるあとがきから、読者に本作品の特徴や位置づけがわかる部分を抜粋する。

「この『日本夜話』の書かれた頃には、モラエスは神戸の領事をしてゐた。日本に住んでからだいたい十年乃至二十年を経た頃で、徳島へ移住してからのモラエスほど、まだ日本人としての生活に徹底してゐなかつたと言へる。だから、この『日本夜話』は『徳島の盆踊』や『おヨネと小春』に比較すると、ひどく暢気な作品である。」

「『日本夜話』を讀み味ふと、後年に於ける「紅毛日本文學」の特徴がすでに萌芽を見せてゐるのに氣づくと思ふ。」

巻末には先に同社から発行された『日本精神』と『徳島の盆踊』の紹介が載っている。また、小泉八雲の著書 4 冊と小泉八雲に関する評伝があり、小泉八雲と一緒に売り出そうとしていたことがここにも表れている。

5. 『おヨネと小春』について

5-1. 秋朱之介の宿望

四冊目の邦訳『おヨネと小春』は 1936（昭和 11）年 6 月に昭森社から刊行された。昭森社は森谷均が同年に起こした会社で、すでにくつもの出版社で本の製作をしていた秋朱

¹³ 『アミエルの日記』前編は木村毅訳で、後編は柳田泉訳で春秋社から刊行された。

¹⁴ 『アミエルの日記』全 8 巻、河野与一訳、岩波書店、1935-1941 年。

之介が手伝っていた。『おヨネと小春』の出版は、以下に述べるように秋朱之介が大きく関わった。

表の資料 5 は昭森社の PR 誌『木香通信』1 号（1936 年 4 月）に掲載された『おヨネと小春』の広告である。文末に〈秋〉と記されていることから秋朱之介が書いたことがわかる。秋はこの広告文に「モラエスの本を一冊は刊行してやらねばならぬ、出すならば「おヨネと小春」に限るといふ我が多年の宿望がこれで一つ完成された」（下線は筆者による）と記しているが、モラエスをいつどのような形で知ったのか気になる点である。モラエスの生前の 1925（大正 14）年頃から東京外国語大学葡萄牙語学科の学生らが中心となってモラエスを広く紹介しようと試み、東京や大阪の新聞や雑誌でモラエスを取り上げた記事を發表したことがあったが、モラエス是有名になることを嫌ったためブームとなることはなかった（岡村 1991, 2000, 佐藤 2018, 河田 2021）。モラエスは 1929（昭和 4）年の 7 月 1 日に亡くなったが、この時にも全国的に報道された。秋はこの年に出版の世界に身を投じたが、モラエスの生前から亡くなるまでの時期にすでに彼に高い関心を抱いていたと思われる。

5-2. 谷崎潤一郎との類似

この広告文では「谷崎潤一郎が『春琴抄』を書いた態度とモラエスが『おヨネと小春』を書いた態度がよく似てゐる」と谷崎との類似を指摘している点が他のモラエス評にはみられない特徴である。具体的にどのようなところが似ているのか示されていないので推測するしかないが、作品のテーマが女性への献身的な愛である点が一致していることを指していると思われる。また、谷崎は『春琴抄』を著した時に実生活において二番目の妻古川丁未子と離婚したばかりで、『春琴抄』は不倫相手の松子と自分を重ね合わせた作品である。作品の背後に女性との別れがあるという点も（離婚と死別という違いがあるが）似ているといえるかもしれない。『春琴抄』が發表されたのは 1933（昭和 8）年であり、人々の記憶に新しい作品ということもあって『おヨネと小春』の宣伝に使われたのであろう。さらに付け加えれば、谷崎は『春琴抄』のように好んで情痴の世界を描き、『近代情痴集』¹⁵を編集するなどこの分野の大家であるが、モラエスも佐藤春夫に「情痴の詩人」と評された¹⁶。『おヨネと小春』という作品自体には情痴の要素はあまり感じられないが、秋には佐藤春夫のモラエス評が頭にあったことだろう。

5-3. 秋朱之介による装丁

1936（昭和 11）年 8 月の『木香通信』2 号にも『おヨネと小春』の広告が載ったが、「秋朱之介が颯爽たる装釘 苦心に苦心を重ねた稀有の名譯。颯爽と初夏の店頭を飾る」という文言が 1 号から新たに加わっている。装丁を宣伝文句とするだけあって藍色の縦縞模様

¹⁵ 『近代情痴集』1919（大正 8）年，新潮社

¹⁶ モラエスの七回忌に参列した佐藤春夫は、すぐに大阪朝日 1935（昭和 10）年 7 月 2-7 日に「徳島見聞記」を連載した。

の箱、黄色の背表紙、白と銀の市松模様の表紙¹⁷を施されたこの本は、爽やかな印象を与える作りになっている。秋は装丁にこだわった出版人として知られており、「真の出版家は芸術家、特に詩人または美術家でなければならない。でなければ、そういう芸術家との共同で遂行されなければならない。その意味で、私はある種の出版は芸術であると思っている。」（秋 1968）という理念のもとに美本の製作にこだわった。丁寧な装丁という点では、第一書房の長谷川巳之吉も相当なものであった。第一書房で雑誌のカットを描いていたグラフィックデザイナー亀倉雄策は長谷川の装丁について、「あの方の右に出る人では秋朱之介さんという方ぐらいでしょうが、長谷川さんの後から出た人ですから……」と語っている（大久保 1981）。しかし、第一書房から発行された三冊のモラエスの著作は、重厚な装丁ではあるものの地味な感はいなめず、特別凝った作りにはなっていない。

5-4. モラエスは詩人か

秋もまた「詩人モラエス」と記しているが、モラエスを詩人と呼ぶことの妥当性についてここで述べておく。モラエスは本国ポルトガルでは *escritor*（作家、著述家）であり、*poeta*（詩人）とはみなされていない。実際、モラエスは詩集を出したこともなければ、商業作品として詩を発表したこともない。著作の作風は、情緒あふれる表現に特徴はあるにせよ、「エキゾチシズムに取り憑かれた詩人の幻想ではなく、日本の真実を伝えた」と感性よりも卓越した観察力と分析力が評価されている（Capitão 2012）。花野や佐藤春夫はモラエスが18歳の時に女性に告白した詩を褒めているが、駐日大使を務めモラエスを研究したアルマンド・マルティンス・ジャネイラ（Armando Martins Janeira）は、同じ詩を評して「へたな詩」とにべもない¹⁸。当然花野は、モラエスの詩が本国では評価されていないことを知っていたはずであるが、それでも詩人モラエスを前面に出し、『おヨネと小春』のあとがきにも「愛に生き、愛に死んだ詩人」「女性に対する愛に徹した詩人」と評し、その後も「詩人モラエス」にこだわり続けた。その理由として佐藤春夫がモラエスの詩を激賞したことがあると考えられる¹⁹。佐藤がモラエスを「情痴の詩人」と評したことはすでに述べたが、佐藤は七回忌法要当日の徳島毎日新聞にも「彼の第一の美点たる大詩人」と評している²⁰。当時は、詩人がもてはやされた時代でもあり、特に「真の出版家は芸術家、特に詩人または美術家でなければならない」と考え、自らも詩人を目指していた秋朱之介がモラエスの『おヨネと小春』の出版に力を入れたことにおいて「詩人モラエス」戦略が役立ったに違いない。

6. 太平洋戦争から戦後にかけての出版

¹⁷ 平田芳樹によるウェブサイト『編集工房スワロウデイル』第187回 1936年のモラエス『おヨネと小春』（2016年9月4日）によると雲母刷り技法が用いられている。
<https://www.swallow-dale.jp/favorite181-190.html#fav188>

¹⁸ 『定本モラエス全集 III』の解説より（集英社、475頁、1969）。

¹⁹ 花野と佐藤の関係については本報告書の河田「戦前のモラエス受容における花野富蔵と佐藤春夫—日本の文学者におけるモラエス受容（2）—」に詳しく述べられている。

²⁰ 昭和10年7月1日付の徳島毎日新聞「モラエスの未刊詩」

『おヨネと小春』の出版から5年経った1941(昭和16)年に『極東遊記』、1942(昭和17)年に『日本歴史』と『大日本 歴史芸術茶道』が出版された(表)。これらについての書評を見つけることはできなかったが、1969(昭和44)年の『定本モラエス全集 I』付属の「月報」に収められた「一つの紙碑—編集のことば—」に、「戦争とファシズムの時代で、モラエスの真意が正しく伝えられた、とは言い難い事情があった。極端に言えば、戦争目的のためにねじ曲げられ、日本人の心理のファシズム化に利用され、あるいは利用されようとした。」とある²¹。佃實夫は『わがモラエス伝』(佃1966)の中で、終戦の翌年に花野の語ったこととして、日本を賛美したモラエス本の出版は禁止されなかったが、それでも皇室やイデオロギーのことで、翻訳から抜かしたり、伏字をよぎなくされた部分もあったと書いている²²。また、占領下の日本で、モラエスの翻訳を出版するような時代はこないと思っていたと述懐している。

戦後、モラエスの本が再び出版されるのは1954(昭和29)年に『日本精神』が復刻されるまで待たなければならなかった²³。同書の解説に久野収は「われわれは日本の伝統を内部から未来に向かって開き、民主主義を伝統の作りなおしの問題として提起する地がための資料として、モラエスの書物に真剣にとりくまなければならないのである。」と記している。これはモラエスの著作を昔とは違った読み方をすべきであるという提言であり、戦前・戦中における読まれ方を否定したものである。時代が隔たった今日ではイデオロギーうんぬんから語られることはほとんどなくなり、作品自体の興味や、時代風俗の歴史資料的関心から、あるいはモラエス個人の数奇な人生に対する興味から読まれるようになっていく。

以上のように本稿ではモラエスの初期の邦訳の刊行の背景について整理し考察した。戦後から現在までについては稿を改めて述べることにしたい。

秋朱之介「ル・ポールの書痴」. 秋朱之介『書物遊記』. 書肆ひやね. 1968.

大久保久雄「第一書房ノート — 付・第一書房図書目録 —」. 『出版研究』12号, 216-230頁. 1981.

岡村多希子「戦前におけるモラエス顕彰」. 東京外国語大学論集 第42号, 183-200頁. 1991.

岡村多希子『モラエスの旅—ポルトガル文人外交官の生涯』. 彩流社. 2000.

河田和子「貴司山治におけるモラエスの影響—日本の文学者におけるモラエス受容—」. 『令和2年度総合科学部創生研究プロジェクト経費・地域創生総合科学推進経費報告書. 異文化に照らし出された四国—グローバルな視点からの地域文化に関する研究から』(～), 73-86頁. 2021.

²¹ この編集のことばの筆者は、定本モラエス全集編集委員会委員である志賀直哉、井上靖、遠藤周作、A・マルチンス、佃實夫の連名となっている。

²² 『わがモラエス伝』の中身には、事実ではない創作の部分が多く含まれているが、当時花野は存命であり、このような会話が合ったことは事実であろう。

²³ 1954年はモラエス生誕100年にあたり、それを記念して河出書房が『日本精神』を復刻した。

佐藤征弥. 「モラエスを初期に国内外に紹介した会田慶佐」. 『平成 29 年度総合科学部創生研究プロジェクト経費・地域創生総合科学推進報告書 異文化に照らし出された四国:外国語文献の調査・研究から』, 52-61 頁. 2018.

佐藤征弥 「モラエス七回忌法要の背景 — 顕彰、観光への期待、『日本精神』刊行の意味するもの —」 『令和 2 年度総合科学部創生研究プロジェクト経費・地域創生総合科学推進経費報告書 異文化に照らし出された四国 : グローカルな視点からの地域文化に関する文献調査から』, 46-60 頁. 2021.

佃實夫 『わがモラエス伝』. 河出書房新社. 1966.

徳島県立図書館編集発行 『モラエス案内 モラエス生誕百年祭 記念特集 (徳島文化 19) 』. 1955.

長谷川郁夫 『美酒と革囊 第一書房・長谷川巳之吉』. 河出書房新社. 2006.

花野富蔵. 「モラエスと日本精神」. 『セルパン』 53 号 (7 月号) , 82-83 頁. 1935.

花野富蔵. 「モラエスの徳島日記」. 『セルパン』 55 号 (9 月号) , 122-128 頁. 1935.

Maria Margarida da Silva Faria Capitão “Entre duas civilizações: O universo de leituras em Wenceslau de Moraes”. Faculdade de Ciências Sociais e Humanas (FCSH), Universidade Nova de Lisboa (2012)

表 モラエス著作の邦訳の広告文・書評（1935-1942）

発行時期	書名、出版社	広告文・書評	資料 No
1935/6/25	『日本精神』 第一書房	<p>(新聞広告, 『モラエス案内』132頁)</p> <p>ヴェンセスラオ・デ・モラエス! この南欧の詩人は、遂に第二の八雲として我等の手に蘇った!</p> <p>モラエスと日本・・・それは「業」のごとき宿命だ。四十年の日本生活! 魅惑と哀愁と法悦とが彼に一切の名利を捨てさせ、徳島の陋屋に隠棲して、遂に悲痛なる孤独感がみずからの頭をわって自殺をさせるまで、文豪モラエスの文芸道にも荊棘がつづいたのだ。</p> <p>南欧詩人の「じやば文」、然しその優婉の詩情はピエル・ロティと競い、神ながらの道を思想してはカモエンス(原文ママ)の象徴の哲学を遂うのである。だが、その深い人間性をろ過してくる日本精神! そこに我々の見知らぬ日本の面影が、永遠に光と匂いと影とを我々の胸に投影するのだ。過ぎ越し方の四十年! しかし日本はこの文豪を知らなかった。</p> <p>小泉八雲とモラエスとは、日本を熱愛し、日本の文化に味到し、日本の女を娶り、日本の土と化した点で相似するところが多い。しかし、モラエスの八雲と異るところは、日本精神を思想して現実の日本を描破した点である。</p>	資料 1
		<p>(昭和10年6月の日本図書館協会評)</p> <p>我々は、ラフカディオ・ヘルンを想うとき、同じく日本を愛し、日本の土となった文人、ヴェンセスラオ・デ・モラエスの名を忘れてはならない。モラエスはポルトガルの人、言葉の関係で広く知られなかったが、日本人を深く理解した点に於いて、決して、ヘルンに劣るとは言えないであろう。モラエスの日本に来たのは明治三十年頃、その作品はヘルンの歿後を受けて次々と故国で出版された。晩年は妻の郷里に移り住んで、その地に残る日本の伝統の気風を通じて、日本人の生活を十分に味到し、昭和四年淋しくその生涯を閉じたのである。</p> <p>モラエスの著述は可なり多いが、未だ殆んど邦訳されたものを見ない。この「日本精神」は最後の作で、モラエスの日本観を纏めたものと見ることができる。はじめに「わたしは日本人たちが、事物を根本的に味うとき、どのように見たり感じたりしているかということの本質的に摺りてみたいと思ふ」とある。生活、文化、歴史の種々の相に触れているが、実によく日本人の生活に同感し、理解していることが感ぜられる。全体として日本人の社会生活に於ける没個性、自然との融合感を強調している。又「日本そのものがことごとく芸術である。」とさえいう著者、やはり伝統の優美な文化へ強く惹かれているが「支那文明との交流に見られたああした例から推しても、西洋文明に優しさとか、雅かさとか、巧みさとか、正確さとかの点に優れた長所を加味した一種の文明を日本に発生させるにきまっている」と日本の将来への期待を表白している。簡潔で、訳文も巧みであり、「あとがき」としてモラエスの生涯の可なり詳しい紹介がある。</p>	資料 2
		<p>小山助学館の新聞広告(1935/7/1の徳島日日新報)</p> <p>「徳島の盆踊」「およねと小春」「茶の湯」等日本精神を思想し、現実の日本を描破した文豪モラエスの遺作集特に関係深い徳島のインテリゲンチャ諸氏に薦む</p>	資料 3

1935/9	『徳島の盆踊』 第一書房	<p>(昭和 11 年発行の『日本精神』の巻末)</p> <p>徳島に安住の地を得たモラエスは孤獨と自然に没入して静かに日本の思想と生活とを味ひ、わが随筆文學の精髓たる『方丈記』や『徒然草』や『枕草子』をこよなき友として、そのペンはそこはかとなく一卷の日本風物詩をなした。</p> <p>しかもモラエスの萬物を捨離して行ひすました求道の底を流れる日本的な思想と生活に脈々と波うつものは、かの詩聖アミエルの示した人生哲學の深刻さと愛惜とを偲ばせるものでなくてはならない。實に本書こそはモラエスがアミエルの言葉に従ひ「心の遺書」として我等に與へた彼の『方丈記』であり『徒然草』に他ならぬ。</p> <p>モラエスは數多くの著書の中、『徳島の盆踊』と『おヨネと小春』とを最も愛好しおヨネと小春を祀った佛壇を慈雲庵に託するに際してひそかにその筐底にひそめておいたといはれてゐる。</p>	資料 4
1936/2/1	『日本夜話』 第一書房		
1936/6/20	『おヨネと小春』 昭森社	<p>『木香通信』1号(1936年4月)</p> <p>「おヨネと小春」は風信に托して日本を歌ひ、日本に憧れ日本の土と化した詩人モラエスが至高至愛の發露とも言ふべき最大作品である。</p> <p>谷崎潤一郎が「春琴抄」を書いた態度とモラエスが「おヨネと小春」を書いた態度がよく似てゐると思ふ。モラエスは遠く故國の人々に「おヨネと小春」や「茶の湯」を通して、日本の風俗人情を物語つてきかせてゐるのである。我々日本人が極くあたりまへの事として意識しないことに對してもこの異邦人の眼には鋭く鮮かに映つてゐて、日本の讀者が思はず氣付かせられることも多い。彼モラエスはその詩人としての麗筆をふるつて書き残した十四卷の書物のうちで、この「おヨネと小春」を引抜いたら彼の重味はおそらく半ばは減じられたであらう。本書はそれ程彼にとつては重要な作品であつた。彼は第二の小泉八雲と呼ばれて遂に徳島の土と化した。そして生前彼が一番愛着をもつてゐた書物「おヨネと小春」がモラエスの愛弟子花野氏の名譯によつてここに發刊されやうとは。本書はそうしたきづなの上に咲いたたつた一輪の眞紅の花だ。本書にはモラエスの血が流れてゐる。本書にはモラエスの愛があふれである。そして彼が遂に叫んだ言葉は何であつたか。「日本そのものがことごとく藝術である」といふのであつた。</p> <p>「おヨネと小春」にはモラエスの生涯がたたみこまれてゐるといつても過言ではない。本書をよんで雲にうまつた谷川の底を流るゝ、流のやうなモラエスのもゆるやうな情熱に讀者よ、あなたのかはきを醫すがよい。モラエスの本を一冊は刊行してやらねばならぬ、出すならば「おヨネと小春」に限るといふ我が多年の宿望がこれで一つ完成されたことになる。</p> <p>附録としてつけた「茶の湯」は芭蕉の俳句でもよむやうな後味のよいもので、もののはれを知る詩人モラエスの俳諧ともいふべき枯淡な作品である。(秋)</p> <p>なお、『木香通信』2号(1936年8月)にも同様の広告が載り、以下の文章が加わっている。</p> <p>「秋朱之介が颯爽たる装釘 苦心に苦心を重ねた稀有の名譯。颯爽と初夏の店頭を飾る」</p>	資料 5

1941/4	『極東遊記』 中央公論社		
1942/2	『日本歴史』 明治書房		
1942/5/23	『大日本一歴史 芸術茶道』 帝国教育会出版 部		

表に示した邦訳はすべて花野富蔵による翻訳による。